

# ラフカディオ・ハーンが楽しんだ日本音楽

——唱歌、わらべ歌への想い——

はじめに

永田雄次郎

ラフカディオ・ハーン Lafcadio Hearn (一八五〇—一九〇四)と日本音楽との出会い、彼の音楽理解の程度についてはすでに著した<sup>(1)</sup>。本稿は、さらに具体的にハーンが取り上げ、知人へ自らの感動として綴り、家族とともに歌い楽しんだ、大衆とともに存在する日本の音楽(楽曲と呼ぶべきか)について、ほんの一瞬立ち止まって思いを巡らすことをささやかな目的としたい。

一八九〇(明治二三)年の来日以降、日本に生活するハーンの耳には夥しい量の音楽が届いていたことであろう。この地の音楽を学ぼうとするが、彼自身、庶民的な日本の楽曲を楽しそうに口遊んでもいたらしい。どのような歌を、どのような声で歌っているのだろうか。明るく微笑ましいハーンの等身大の姿を見る思いがする。そして、その歌声が、家族との一家団欒の場で響いていたとすれば、より興味が深まったであろう。

日本音楽に親しむハーンの心情に触れ、彼の芸術理解の一端でも窺うことができればこれにまさる喜びはない。さて、ここで、いつも通りの弁解をしておこう。ハーンの世界音楽への眼差しについてここで論考を試みる筆者は、日

本美術史を学ぶ一学徒に過ぎないことを申し添えておく。

(一)

来日して半年、彼は友人で東京帝国大学に勤務するチェンバレン Basil Hall Chamberlain (一八五〇—一九二五)に、一八九〇年十一月付の手紙を送り、日本の音楽の魅力について熱っぽく語っている。

私は日本の音楽についてここ数ヶ月の間、言葉にできない程魅了されています。—— 思いますに、それを歌い、演奏する日本の少女の姿と同じように、その音楽は品が良く、陽気な甘美さ、可愛さを持っているようです。そして、私はその音楽の中にきわめて繊細かつ微妙な芸術的感性が存在することを心から感じる事ができるのです。(2)

おそらく、明治時代以前から伝わる、西洋人には異国情緒が洋溢する「わらべ歌」や俗謡の庶民感覚に満ちた楽曲に対する感想であると思われるが、ここでは、新たな世、明治の御代に立つハーンの耳に響いた日本音楽について論を始めてみよう。ハーンの妻、小泉セツ(節子)(一八六八—一九三二)が彼と日本で暮らした日々について『思い出の記』として著している。

二十四年の夏休みに、西田さんと杵築の大社へ参詣いたしました。(中略)この旅行の時、ヘルンが『君が代』を教わりまして、私共三人でよく歌いました。子供のような無邪気なところがありました。(3)

一八九一(明治二四)年八月七日から一〇日まで、ハーン、セツ、ハーンの松江時代、もつとも親交の深かった松江中学教諭、西田千太郎(一八六三—一八九七)は、出雲大社の盆踊りを見るために杵築に行き、そこでおそらく出雲大社宮司の千家尊紀(一八六〇—一九一一)あたりから「君が代」を教わったのではないかと推察される。ハーン

は、日本の文化について最初に書かれた『知られぬ日本の面影（日本瞥見記）（Glimpses of Unfamiliar Japan）』の第十九章 英語教師の日記から From the Diary of an English Teacher」で「君が代」について語っている。

一八九〇年九月二三日の日付で、松江中学と同じ敷地にある松江師範学校の付属小学校の一教室の授業風景を彼は描く。児童たちは唱歌を習っていた。その中で日本の国歌（national anthem）「君が代は Kimi ga yo wa」も教わっているところであった。ここで、その日付について考えてみよう。この授業が本章の日付通りであれば疑問が生じる。ハーン自身がセツの記述のように一八九一年に「君が代」を杵築で教わったのであれば日時に齟齬が生じる。これについては、『知られぬ日本の面影』が一八九四（明治二七）年九月に刊行された経緯から、彼が松江中学に赴任した直後の出来事とのストーリーをつくり上げたことに起因すると解せば説明はつく。来日直後の「英語教師の日記から」とある虚構がそこに見えてくる。ただし、付属小学校見学の日時はやや異なれども、ハーンがそこでの授業中にある楽曲を聞き、それを「君が代」と判断できたことは動かし難い事実であろう。

一八九〇年十一月三日の天皇誕生日（天長節）に尋常中学校の大講堂の式典の際、出席者一同が「君が代」を斉唱したという記述とともに、その楽譜とローマ字で書かれた歌詞を見ることが出来る。この歌詞の表記が興味深い。

Ki-mi ga-a-yo-o wa

Chi-yo ni-i-ya-chi-yo ni sa-za-ré

I-shi no

I-wa o to na-ri-te

Ko-ke no

Mu-u su-u ma-a-a-dé<sup>㊦</sup>

ハーンは楽譜の音列に沿って歌詞をどのような長さで歌うのかを示している。これについては拙稿で私的見解とし

て楽曲と楽譜の關係を示した分類の「(三) 楽譜を見て、その曲のメロディーラインのみをある程度理解し歌うことができる」<sup>(5)</sup>ハーンの音楽理解があてはまり、楽譜を見ながら彼は「君が代」を歌うことは可能だとも考えられよう。

ハーンは、天皇を敬愛し、「君が代」を斉唱する当時の日本人の心情と同じ感情を共有する西洋人であった。日本人の立場に自らの身を置く態度は、来日後の生活の中に見る彼の一つの特徴であったのかも知れない。西成彦の「ハーンは、いわゆる謙讓の美德というものに対して、めずらしく抵抗を感じない西洋人であった」<sup>(6)</sup>との評価とも通じていようか。

松江中学における彼の前任の教師タツトルや、親しい友でもあったチェンバレンのどうかすると、西洋の文化を尊敬するあまり、日本や日本人、日本文化を見下す態度を取ることとは少し異なっているハーンがそこに立っている。

## (一)

ハーンの訪れた付属小学校の「唱歌」の授業は、「先生がチョークで黒板の五線譜にドレミの音階を書き、アコーデオンの唱歌 (song) の伴奏をしている」<sup>(7)</sup>ところであった。おそらく、ドレミは、ハ、ニ、ホと読ませていたと思われる。三曲を児童が歌うのを聞いていたのであるが、一曲は前述の「君が代」であり、他の二曲はスコットランドの旋律 (Scotch airs) を借りた日本の歌 (唱歌) であることを認めることができた。授業見学の日時は違っているが、一八九一年に「君が代」を知り、彼自身、アイルランド人の父を持ち、イギリスでの生活経験者なので、二曲の旋律がスコットランドのものと同時に判断することは容易であったろう。

ここで、「唱歌」という言葉は二つの意味を有することを知らなければならない。

唱歌 (シヨッカ) は明治五年 (一八七二) 八月の学制頒布以来、用いられることばで、「楽器に合わせて歌曲を

正しく歌い、徳性の涵養情操の陶冶を目的とする教科目」と、その教科において用いられる歌曲と、両方の意味がある。<sup>(8)</sup>

明治時代以前の日本の音楽は西洋風の楽譜を用いず、また、健全な日常生活の場で歌われ奏されるものではない嫌疑があった。明治政府は文部省音楽取調掛を設置し、御用掛、伊沢修二（一八五一—一九一七）を中心に教科としての「唱歌」、その授業で歌われる「唱歌」を作成することに力を注いだことはあまねく知られたところである。この「唱歌」は広く歌（song）の意味と解する場合もあるが、ここでは学校で歌う歌（school song）に限定して考察を進める。

松江の付属小学校で教師が楽譜を用いて児童を教える姿は、西洋に倣った音楽教育の初期の段階をよく伝えている。ただし、これはあくまでも教育には先進的な師範学校付属小学校であるので、一般の小学校とは異なる特殊な例と考える向きも存在するであろう。歌われる楽曲については、日本では未だ旋律もほとんど存在しない時代であり、西洋の曲の旋律に日本語の歌詞をつけて歌われることが多く、当時の全国の小学校では教科書として、「小学唱歌集」初編（一八八一年刊）、第二編（一八八三年刊）、第三編（一八八四年刊）が使用されていた。そのような状況にあつて、ハーンの耳には二曲のスコットランドの旋律がすんなりと入ってきた。

一曲は、「オールド・ラング・ザイン Auld Lang Syne（過ぎ去りし昔）」であつた。イギリスでは久し振りに出会つた友同志が昔を懐かしみ祝い会う内容の歌詞で歌われる。元来は、明るい曲調で、ハーンにとつても祖国を遠く離れた東洋の片隅で、一時、自身からは過ぎ去つた昔日の「幾多の楽しかった思い出 Many a charming memory」を呼び返してくれたと感慨に耽つている様子でもあるのだろうか。しかし、「初編第二〇 蛍（蛍の光）」として、稲垣千穎（一八四七—一九一三）の手による日本語の歌詞は、その内容から明らかなように別離を主題としていることは周知の通りである。

「いつしか年も すぎのとを、あけてぞけさは、わかれゆく」と、縁語法を含んだこの曲の日本語の歌詞を味わうには、ハーンはまだ時が早過ぎた。「美しき誤解」が教室に生じていよう。快活な「オールド・ラング・ザイン」が静かな曲調で歌われるのを彼が聞いた時、その差異をどのように感じていたのであらうか。もちろん、ハーンは本書執筆時には、この意味内容の違いを理解していたと思われる。しかし、論の展開上、あえて、そのような事実を隠し、一つの迫力あるフィクションを成立させたのである。

「オールド・ラング・ザイン」に関して、ハーンがその思うところを語る、一八九四年一月三〇日付、チェンバレン宛の手紙が遺されている。何年前前に「パッティがセント・チャールズ座で歌いますよ」と友人から聞かされた時、昔、演劇記者として勤めていたことからすでに劇場に嫌気がさしていたが、久し振りに演奏会に出かけることにしたと記す。スペイン生まれの名ソプラノ、パッティ Adelina Patti（一八四三—一九一九）が歌った一曲が「オールド・ラング・ザイン」であった。

突然、そこは死のように時間が止まった熱気の中に、私は熱帯地方の夜に「ものまねどり」の喉からの声で、張りつめた縊糸のようなメロディーが甘く、心地良く流れてきました。それは、「オールド・ラング・ザイン」に過ぎません。トレモロや細かい技巧も用いることなく、驚くべき大胆かつ飾り気のない発声でした。あの銀のよな歌声は、今も私の心に遺されています。（中略）「オールド・ラング・ザイン」に比べて、あの時のベートル・ヴェンは何だったのでしょうか<sup>9)</sup>。

この手紙は一八九四年に書かれているので、松江の付属小学校での体験はそれ以前だから時系列的に不合理であると疑問を呈する向きもあることだろう。しかし、パッティの演奏は、ハーン来日前と推測されるので、彼の過去の美しい思い出として、手紙を書いた時に、心の中に湧きあがってきたと想像することは十分に可能であったろう。

筆者の手許にも二曲あるが、パッティの声は今日も聞くことができる。「ラ・カセレーラ（イラディエル作曲）」を

取り出してみよう<sup>10)</sup>。「一九〇六年の吹き込みだが、その時既にパッティは六十三歳の高齢であり、『蓄音機音楽はあまりに若く、パッティはあまりに老いた』と言われたのも無理のないことである」<sup>11)</sup>と、あらえびす（野村胡堂）は評するが、なかなか技巧も衰えず可憐さを失っていないように筆者には思われた。あらえびすは、「晩年は多く英米に暮らして、『スウィート・ホーム』一点張りに歌って歩いたと言われている。六十、七十を越した歌手が、イタリー歌劇などを歌って歩くより、この方がどんなに賢かったかもわからない」<sup>12)</sup>とも記し、「埴生の宿 Home, sweet home」「庭の千草 The last rose of summer」のレコードを推薦している。

このようなイギリスの世俗的な歌曲、民謡を得意とし、一八九〇年の来日以前、全盛期あるいはそれに近い時期に彼女のスコットランド民謡「オールド・ラング・ザイン」を耳にしたハーンが感動し、後々まで心深くその時の情景を秘めていたことは当然といえば当然であるとも思われてくる。彼自身の音楽体験もしくは音楽愛好の原点となり、松江の小学生の歌う「蛍（蛍の光）」に胸躍らせたとする<sup>13)</sup>ことも、これまた納得させられよう。

### (三)

ハーンとスコットランドの曲で思い出すことの一つに、西田千太郎の日記がある。一八九〇年九月二十八日の記載に注目してみる。

九月二十八日 齋藤氏ヘルン氏を招ク。予モ同行ス。音楽等ノ合奏アリ。ヘルン氏も英仏二国ノ歌ヲ唱吟セリ。偶々中秋ノ名月ノ夜ニ当リ、満天織雲ナシ。<sup>13)</sup>

この時、ヘルン（ハーン）の歌った英仏二国の歌は何であったのだろうか。後日の創作である可能性が強いが、同年九月二三日に、松江師範学校附属小学校で「オールド・ラング・ザイン」を聞いたことになっている。パッティの

歌の思い出もある。この場合の英国の歌が「オールド・ラング・ザイン」であると推定することも一概に否定はできない。

少し論の進行からは横道に外れるが、ここで、同時に歌ったフランスの曲とは何であったのかを考えてみることにする。先に触れた一八九四年一月三〇日チェンバレン宛の手紙で、パッティの話題の前に、フランス国歌「ラ・マルセイエーズ *La Marseillaise*」の熱烈<sup>43</sup>について記している。さらに、彼の長男、小泉一雄（一八九三—一九六五）は、著書『父「八雲」を憶う』で、書生の玉木光栄（一八八八—一九七一）が、「得意然と『マルセイユ』を歌ったところが、また父から、そんな壊れた言葉で歌われてはフランス人は皆泣いてしまうよと申され」<sup>44</sup>すつかりしよげかえったと語る。ハーンは「ラ・マルセイエーズ」を好んでいた。この二例のみでは早計ではあるが、この時の英仏の二曲を、「オールド・ラング・ザイン」、「ラ・マルセイエーズ」と想像することも亦楽しい。彼は朗々と二曲を歌ったのであろうか。梶谷泰之は『へるん先生生活記』において、教え子、並河栄四郎が「英国の歌を二つ三つ大きい声で歌われましたのに驚きました」<sup>45</sup>と記したエピソードを紹介している。

これに対して、一雄は前述書でハーンの歌声について次のように書いている。

父の歌うのはまるで四、五歳ぐらいの幼児が歌うようなあどけないアクセントで、陰で聞いていると、とても半白頭のお父様とは受け取れぬほど、誠に可愛らしいものでした。<sup>46</sup>

これは日本語による唱歌を歌うやや自信なげな姿であって、より若い時期、西洋の歌詞で歌う彼は、臆することなく大きな声を出したものと思わせる。

閑話休題。ハーンにとって日本語の歌詞の意味が不明で、「美しき誤解」の上に昔日を思い浮かべた「オールド・ラング・ザイン」の旋律による小学校唱歌「蛍（螢の光）」のほかのもう一曲とは何であったのだろうか。「初編第一八 うつくしき」のメロディーは、有名な「スコットランドの釣鐘草 *The Blue Bell of Scotland*」である。この曲



と判断してもよいものだろうか。この曲とスコットランドの関係について疑問を投げかける人物が存在する。

安田寛は、「スコットランドの釣鐘草」は、「一般には『スコットランド民謡』とされるが、曲はイングランド起源という説が強い<sup>(4)</sup>とする。安田は九一曲の「小学唱歌集」の内、八曲のスコットランド歌曲もしくは民謡が見られると判断している。「初編二〇 蛍（蛍の光）」、「初編二四 思ひいずれば」、「初編三〇 玉の宮居」、「第二編四三 みたにの奥」、「第二編四六 五月の風」、「第三編 才女」、「第三編八一 きのうけふ」、「第三編八二 頭の雪」がそれに該当すると述べる<sup>(5)</sup>。

この中では「才女」がスコット作曲の、現在も人口に膾炙している「アニー・ローリー Annie Laurie」のメロディーで歌われている。日本人の感性にも訴えかけるしやかな旋律で、この曲が「オールド・ラング・ザイン」と合わせて歌われていた可能性もかなり高いとも思われよう。もしそうであれば、自分にとって理想と崇める女性への直向きな愛を歌いあげた原詞世界を思い浮かべているのに対し、日本の平安時代の才女、清少納言と紫式部を誉め称す歌詞であることをまだ理解できていないハーンの心はいかばかりのものかを忖度すると少しばかり微笑ましくもなつてこよう。

「故郷の空 *Comin' thro' the Rye*」もスコットランド民謡であり、この可能性を考えられる方もいらつしやるかも知れない。この曲は、一八八八（明治二二）年から翌年に発行された「明治唱歌」に含まれ、一八九〇年前後に松江の小学校で歌われるのは少し時期が早過ぎるのではと考えることもできようか。

「スコットランドの釣鐘草」に話を戻すと、当時、この曲もスコットランド民謡と思われていたと推し測ると、そこで歌われていた可能性は捨てきれない。安田の現代の学術判断がこの時代に即あてはまるとするの、やや早計ではないのだろうか。

別れの歌「蛍（蛍の光）」を、友との再会を喜ぶ「オールド・ラング・ザイン」と聞いたハーンではある。しかし、

『知られぬ日本の面影』の最終章(第二十七章)「さようなら Sayonara」で、自身の松江中学校離任に際して、師範学校の生徒が送別会を開催し、彼のために「校歌 their college songs」を歌い、会の終わりには、「オールド・ラング・ザイン」の日本語訳版(the Japanese version)を詠唱してくれた<sup>29)</sup>と記す。この時、彼はすでに「螢(螢の光)」の歌詞の真の意味するところを理解していることを明らかにしている。前章に述べたフィクションが鮮やかに浮かび上がる。「美しき誤解」から日本語訳の本意を把握した時間的経過が、『知られぬ日本の面影』の話題の展開の中に見事に描き出されている。

## (四)

「唱歌校門を出でず」この言葉は、唱歌というものは、もっぱら学校だけで歌われるものであって、世間には広がりを持っていないとの意味を示しているよう。だが、東京のハーン家における音楽享受の姿はなかなか興味深い。小泉一雄が次のように著している。

夕食後、すぐに寝に就くのは衛生上宜しくないとの父の意見から、ほとんど毎夕、食後には食堂兼子供室に充てられていた階下十二畳で、我々子供等を初め書生さん達も女中達も諸共に唱歌や軍歌を謡いながら、四角な大卓の周囲を一時間ばかり、グルグルと腹ごなしに巡るのが例になっていました。偶には父や母も仲間入りすることがありました。<sup>30)</sup>

ハーン家の日課であつたらしい。セツも記す。

食事の時にはいろいろ話をいたしました。(中略)それが済むといつも皆で唱歌などを歌いました。<sup>31)</sup>  
何を歌ったのか、一雄は少し明らかにしている。

新美さんは「君が代」でも、「霞か雲か」でも、「汽笛一声」でも、「青葉繁れる」でも皆一様の節で歌ってのける人でした。<sup>22)</sup>

「君が代」、「小学唱歌集」(第二編第三五 霞か雲か)、「地理教育鉄道唱歌(一)」、「(鉄道唱歌)、楠木正成、正行親子の桜井訣別を歌った「青葉繁れる」と、すでに、この頃広く一般に歌われたと推し測られる曲が並んでいる。歌とともに暮らす、と或る家族の姿であり、世相の一部分が見えるように思えてならない。

中山エイ子は楠木正成を、「日本の歴史上の人物の中で最も早く唱歌・軍歌になった人物」<sup>23)</sup>とする。「小学唱歌集」(第三編七九 忠臣)として正成は唱歌に登場する。一八九九(明治三二)年発表された、落合直文(一八六一—一九〇三)作詞の「青葉繁れる」は、軍歌的色彩も見える「楠公唱歌」<sup>24)</sup>と評すべきであろうか、それとも一雄が記す「軍歌」に属するののか、むつかしい判断が要求されよう。これについては次章でもう少し詳しく論じてみようと思っている。

これらの歌を新美さんが一本調子の節で歌う情景には悪気のない苦笑が伴う。新美さんとは、新美資雄、資良兄弟のいずれかである。ともにハーンの家で書生であったが、兄・資雄は一八九九年商船学校を卒業して、回家を去り、その年は「青葉繁れる」が発表されることから、兄の後に書生を引き継いだ資良と考えることが自然のようである。

新美さんとともに先に紹介した書生の玉木光栄の姿も見えてくる。彼について一雄は、「声の好い唱歌<sup>25)</sup>の上手な光栄さん」<sup>26)</sup>と記す。注目すべきは、「唱歌」に「うた」と振り仮名を振ることである。見過ごしてはならない。「唱歌」を学校で歌うような「学校唱歌」としてのみではなく、「歌」全般と表記されることがあるのかも知れない。ただし、同じ箇所、「父は子供等の歌っている軍歌や唱歌なら大概覚えて歌いました」<sup>26)</sup>と指摘するように、歌そのものを唱歌とする一方、軍歌とジャンルを異にする歌を唱歌と呼ぶなど、同一の言葉ながら、二つの意味の違いについて暗黙

の区別を持って使い分けているこの時期の様相を示唆しているであろうか。「唱歌」という言葉の使い方も複雑である。

一雄は弟の巖（ハーンの次男）が通う、三十数名の園児の四ツ谷の小さな幼稚園の様子についても触れている。園長は元小学校の校長をしていた加藤某の妻であった。加藤夫人はそこで、「ここなる門は」、「岸の柳の影清く（舟遊び）」、「廻れ独楽」などの唱歌を歌いながら遊戯をしていたとの記述<sup>27)</sup>は、当時の幼稚園で唱歌教育がなされていたことを物語る。巖が家に帰り習った唱歌を夕食時などの寛ぎの間に、にこやかに聞き、一緒に歌ったことを想像することもさほど困難ではないだろう。この光景は、小学唱歌などは家で歌われなかったとする「唱歌校門を出でず」の言葉に対する、一つの疑問を呈する実例となるかも知れない。それとも、ハーン家は聊か特別であったのか。

## (五)

ハーンは、子どもの歌う「軍歌」は大概は覚えていて歌っていることはすでに記した。『知られぬ日本の面影』に続き、一八九五（明治二八）年に刊行された『東の国から Out of the East』所収の「柔術 Jujitsu」の中で小学生が「古の忠臣の歌 the ancient songs of loyalty」や「新しき軍歌 the modern songs of war」を習っていると記述している。<sup>28)</sup>

松江時代には、松江城二の丸広場で小学生が若い教師によって行進を教わり、「建武の昔楠公は」と歌っているところしばしば出会っている。『知られぬ日本の面影』に描かれた情景である。これについては、本田秀夫「八雲と『楠木正成の歌』（へるん八号）に詳しいので重複は避ける。

「軍歌」は西洋の楽譜で書かれた洋楽でもあり、学校でも教える点で「唱歌」と深い関係を持つものであると考え

ることができよう。その歌詞が時局と結びついてくるにつれて、民衆は、「軍歌は今でいえば、ポップスであり、演歌であり、洋楽であり、映画主題歌であり、アイドルソングであり、人々の生活に密接に結びついた娯楽であった。すなわち、軍歌は民衆の歓迎するエンターテイメントであったのである」<sup>34</sup>と捉えるに至り、その結果、この時代の歌のジャンルとして定着したと思われないだろうか。

時は、一八九四（明治二七）年から翌年の日清戦争、一九〇四（明治三七）年から次年にかけての日露戦争を迎える。辻田真佐憲は、「日清戦争が始まった一八九四（明治二七）年から翌年の二年間だけで、軍歌集は一四〇冊以上、軍歌は一三〇〇曲以上も作られた」<sup>35</sup>と述べている。ハーンは『天の河綺談その他 The Romance of the Milky Way and Other Studies and Stories』の「日本だより A Letter from Japan」で日露戦争当時およびそのすぐ後の現実を書き記す。

今やすべての小学校において児童たち (boys and girls) は広瀬中佐の歌を歌っている。その曲は行軍歌 (marching song) じゃあな。<sup>36</sup>

同書で、大和田建樹作詞、納所弁次郎作曲の「広瀬中佐」の英訳を記しながら、広瀬武夫（一八六八—一九〇四）について、ハーンは西欧の読者に次のような記事を掲載する。

おそらくは英語圏の読者の各々にとつては海軍中佐・広瀬武夫の名前はほとんどご存知ないと思うが、彼はまさしく (deservedly) 国民的英雄の一人となった。<sup>37</sup>

日露戦争中に、「福井丸」に乗っていた部下を探していたところ敵弾に当たって壮烈な戦死を遂げた広瀬中佐は国民の中から生まれた英雄と称された。ハーンも、この広瀬中佐の歌を歌っていたとセツは書いている。

「唱歌」、「軍歌」以外にもハーン家で話題となった歌のジャンルが存在したことを一雄が記している。「声といリスムいリズム

の前で歌った時、二度の失敗があったらしい。一度目は「讚美歌」、二度目は「ラ・マルセイエーズ」を歌ったことがそれに該当する。

ハーンがキリスト教を嫌っていたことは彼の著作の中でもよく知られている。教会やミッションスクールなどで歌われていた「讚美歌」を聞くのは彼には論外のことであり、「私の家でそうした歌だけは歌ってくれるな」<sup>[84]</sup>とのハーンの言葉は充分に首肯される。二度目の失敗についてはすでに記したので割愛するが、日本人にとつての外国曲がハーン家では歌われていたことが明らかになっているようにも思える。外国の歌については、一雄は父から英語の子守歌を教えられている。もちろん、ハーンの出自に基づく、日本人にとつては遠き外国の曲は、彼にとつて身近な存在であった。

一雄の教わったこの英語の子守歌を傍で聞いていた「奇抜な女中」<sup>[85]</sup>おろくが、「いつしか語呂の似た出鱈目な日本語の文句に改めて得々然と歌い」<sup>[86]</sup>、それが女中仲間に流行した時、その「戯れ歌」を聞いたハーンが、「もう決してかかることは歌ってくれるなど厳禁」<sup>[87]</sup>したというエピソードは、当然といえば当然でもあった。

「オッペケペー」に代表される、この当時の「流行り歌」<sup>はや</sup>については、ハーンの思いが少しだけ推量できる。牛込富久町に一家が住んでいた時、一雄が「帽子にも洋服にも金モールの付いた、海軍士官の礼装に似た扮装の菓売り」<sup>[88]</sup>が、「オイチニイ」と歌うあとをついて行つたことをハーンは「ハーメルンの笛吹き」の話に譬えて咎めている。このような巷の戯れ歌について、おろくの場合と同様に、彼は好んでいなかったと思われてくる。あまりに俗世間の「流行り歌」の世界の中には彼は立ち入ることが難しかったと考えるべきなのか。

当節、やや知識階級に近い家庭の中にあつた「讚美歌」、「外国の歌」への胸騒ぎ、過度に庶民的に傾く「流行歌」に対する微かな抵抗感——ハーン家は少しばかり特殊なのであつたのだろうかと思つてしまう筆者がそこに立ち竦んでいる。

(六)

一雄の著書に一人の女性が出てくる。

故郷越後の盆踊りの歌なら朗らかに歌いましたが唱歌や軍歌はさっぱり歌えぬお常と申す偉大な体軀の女中がいました。お常は新美さんの従妹でした。牛込から大久保へかけて約三年間いました。<sup>39)</sup>

新美兄弟の従妹にあたり、「私達兄弟にはいつも優しく、正直者で涙脆い女」<sup>40)</sup>と、お常が一雄によつて紹介されている。「盆踊りの歌」とは、明治時代以前から存在することの多い曲で、都会、地方を問わずさまざまな種類のものがあったと思われる。越後出身のお常が、たとえ唱歌や軍歌は歌えずとも、地元の「盆踊り歌」を得意とするのはごく当然であろう。「盆踊り歌」は、日本に古くから伝わる「わらべ歌」や「民謡」、「俗謡」などと合わせて、程良い「日本の伝統的かつ民衆的な歌」とでも呼べるものであつて、ハーンがそのような歌に愛着を抱いていたことは彼の著作に明らかである。『知られぬ日本の面影』の「伯耆から隠岐へ From Hōki to Ōki」の境港で、荷物を積み込む人々が荷の軽重で、歌う曲（労働歌）を変えることを聞き分けている。

Yan-yui!

Yan-yui!

Yan-yui!

Yan-yui!

Yoi-ya-sa-a-a-no-do-koe-shi!<sup>41)</sup>

重い荷物を扱っている様子がこの歌からも充分に窺える。ハーンの耳は鋭く反応する。しばらくすると船中から

大山が見え始める。同行の友人の歌う有名な「関の五本松」に聞き入るハーンの姿がそこにある。日本に来てさほど時を経ていない時期から日本の歌に興味を示すハーンは、素朴なお常の歌を心から楽しんだことであろう。

お常の「盆踊り歌」のみならず、日本の伝統的で庶民的な音楽をハーンは日常の暮らしの中で愛し続けた。そのよくな彼の心情を察するために、一九〇一（明治三四）年刊行の『日本雑記 A Japanese Miscellany』中の「民間伝承落穂集 Folk-Lore Gleanings」に含まれる「日本のわらべ歌 Songs of Japanese Children」に耳を止めてみる。

私ははじめて日本に着いた頃、子ども達は彼ら彼女らの祖父母から教わった古い日本の歌を歌っていたものである。当時、家庭教育というものは、通常その人々に委ねられていた。しかし、今日、ちいさな国民 (little folk) は、道端やお寺の境内で遊んでいる時、学校の教室で習う新しい歌を歌っている。それらは西洋の音階を基本として作曲されたものである。それよりはるかに私にとって興味深い明治以前の歌をめつたに聞くことができない。<sup>(42)</sup>

ここで、日本の唱歌を定義しているが、それにも増して、児童の歌う古い日本の歌に興味があることをハーンは述懐している。来日後、かなりの年月を過ごした彼の嘆き、溜息が聞こえる。しかし、彼は、子ども達の日常の遊びと切り離すことができない歌は、まだ高齢な人々がこの時代活躍しているので、子ども達は大好きな昔の歌と接する機会が多いとの理由で、今、暫し消え去らないとも考えている。「でも、それらの心楽しませてくれる人々 (these charming old people) が先祖様のところへ行つたならば」<sup>(43)</sup>。ここでも溜息が出る。

後世まで遺しておくべき、子ども達も大好きな日本の古い歌に関して、ハーンは、昔のわらべ歌 (the old-time child-songs) とわらべ歌 (non-sense verses) を六項目に分類し、これらの魅力を語っている。その (三) 'おもむきな遊戯の歌 (Miscellaneous Play-Song) の中に、踊り歌として蓮華の歌が掲げられている。

れんげの花 ひらいた



ひらいた ひらいた！

ひらいたと思ったら

やっこさと つぼんだ！<sup>(44)</sup>

この踊り歌については、セツの記述は重要である。

焼津などに参りますと海浜で、子供や乙吉などまで一緒になって「開いた開いた何の花開いた、蓮華の花開いた……」の遊戯をいたしまして、子供のようは無邪気に遊ぶこともございました。<sup>(45)</sup>

日本のわらべ歌を踊りとともに楽しく体験する明朗なハーンが見え出す。「羽根つき歌」の美しさ、羽根をつく少女達の可愛らしさは、その優雅な動きによる絵画的魅力を超えたものとして描写されている。

その上さらに、その魅力はただただ見ていて美しいだけではない。羽根つきをしている間、この妖精たちはちょっと不思議なリズムとメロディーのかわいい歌を歌い、私たちの耳を甘美な響きで満たせてくれる。それは西洋の人々の耳では、まったく思い出すことも不可能な（日本の）歌なのである。<sup>(46)</sup>

視覚と聴覚、それ以上に五感を通して、日本人の立ち振るまいの魅力を感じているハーンがそこにいる。わらべ歌など日本古来の歌に対するハーンの心情の発露そのものである。これ以上、ハーンと伝統的な日本の歌について何を語ることができようか。

ここで、もう一度、新たな日本の音楽、唱歌について、少しでも触れておく。ハーンの伝統的な日本の歌への高い評価に反比例して唱歌への評価はよく低くなって行くのであろうか。一例を示してみる。彼の松江時代に教え子であり、その家族とともにハーンに雅楽の面白さを伝えた大谷正信（一八七五—一九三三）に後年、彼は次のような依頼をする。

多分、貴君は今月私に子どもの遊戯歌を集めたものを（ローマ字に直して）送ってくれることができますでしょ

う。それは私達が「歌と遊び」と呼んでいる課題に必要なのです。しかし、私は新しい学校唱歌は求めません（どこかとても可憐でかわいいものを除いて）。ただ、本当に小さな子ども達によつて歌われる古い趣きのあるホームソングや遊戯歌が欲しいのです。<sup>(47)</sup>

ハーンの求めた歌の中に、新しくとも可憐で可愛い唱歌であれば、古くから伝わるわらべ歌などの遊戯歌と同等の評価を与えていることは、もつと注目しておくべきであろう。

## おわりに

ハーンは金比羅船々を特に上手に歌つたらしい。それだけに終わつてはいない。

大卓子を退けて、「金比羅船々追手に帆かけてシユーラ、シユ、シユ、シユ」を歌いながら、畳の縁を踏んで鬼ゴッコをして遊んだこともありました。これには父も時々喜んで加わりました。<sup>(48)</sup>

日本の文化を論じる時、来日直後の手離しの礼讃からやがて懐疑的になることも多かったハーンが、心の底から陽気さを振り撒いて動き回っている。『知られぬ日本の面影』には「舞妓 Of a Dancing-Girl」という章がある。その冒頭、日本の宴会の始まりの静けさを不思議に思いながら、やがて賑やかになり、三味線の「金比羅船々」で最高点に達するように書き綴る。この宴会の雰囲気や日常生活に彼は持ち込んだ。このことは、ハーンがたびたび宴席を体験し、楽しんだことを物語つてもいよう。西田千太郎の日記を再び見る。一八九一年七月二九日のことである。

ヘルン氏ト共二大社二昇殿。ヘルン氏ト共二千家氏ニ招カレ、古書画ヲ観、非常ニ鄭重ナル饗応ヲ受ケ、夜半ヲ過ギテ帰ル。ヘルン氏大酔。<sup>(49)</sup>

おそらくは歌舞音曲を伴う宴の雰囲気と酒に酔うハーン——実に明るく、人の心を愉快にさせる逸話である。彼が

日本の音楽に接する時は、松江時代のみならず、いつも、割合に手離しで、明朗、快活な気分が漂うことが多いのではと思えてくる。家庭生活で、唱歌、軍歌、わらべ歌などを楽しんで歌っている。ただし、かわいい声で。わらべ歌には踊りさえつけ加わる。心が救われる感じがする。

日本人は、明治時代に新しく西洋文化を受け入れた。それに合わせて、あまりに西洋化を急ぐ日本の姿勢に危惧の念を持ち始めた。伝統的な、そして彼を驚愕させた日本の麗しき姿が消え始めようとしていることを嘆く。その一つに、日本人の美意識に基づく芸術文化の軽視に対する彼の鋭い指摘を見ることもできる。その伝統的な文化の持つ味わいを、当時の庶民とともに心より理解し、なおかつ楽しもうとしたのも彼であった。

さて、これまで筆者は、美術を中心とする芸術、芸能とハーソンの関わりについて、拙文を徒らに書き散らしてきた。日本美術史を研究しておればいいはずの者が、そこに留まっておくという自制の心を忘れ、厚かましくも音楽の領域にまで足を踏み入れ、荒唐無稽な論を展開するに至ったようである。「ハマルティア（的外れ）」は人間の大きな罪である。

だが、あと一年余りで定年を迎える筆者にとっては、これも本稿で終了する。「戯言を語り続けた厚顔無知なる一日本美術史学徒、以て瞑すべし」

#### 註

- (1) 拙稿「ラフカディオ・ハーンと日本の音楽との出会い——メロディーと絵画的情景の間で——」（人文論究 第六十五巻 第四号）
- (2) Lafcadio Hearn: *Life and Letters 2*, Houghton Mifflin Company 版（一九二二）（一九八八年 臨川書店より復刻）を用
- (3) 小泉セツ（節子）『思い出の記』（小泉節子 小泉一雄『小泉八雲 思い出の記 父「八雲」を憶う』（一九七六年 恒文社）

- に所収]
- (4) Lafcadio Hearn : *Glimpses of Unfamiliar Japan 2, XIX. From the Diary of an English Teacher*, Houghton Mifflin Company 版 (前掲)
- (5) 註(1)に同じ
- (6) 西成彦『ラフカディオ・ハーンの耳』(一九九三年 岩波書店)
- (7) 註(4)に同じ
- (8) 堀内敬三・井上武士編『日本唱歌集』(一九五八年 岩波書店)における解説
- (9) Lafcadio Hearn : *Japanese Letters : Houghton Mifflin Company 版* (前掲)
- (10) 「伝説の歌声」懐かしき歌曲集』(二〇一一年 財団法人 日本伝統文化振興財団 CD VZCC-1041) に所収
- (11) あらえびす『名曲決定盤(下)——声楽・管弦楽篇』(一九八二年 中央公論新社)
- (12) 同右
- (13) 梶谷泰之『へるん先生生活記』(一九九八年 恒文社)
- (14) 小泉一雄『父「八雲」を憶う』[小泉節子 小泉一雄『小泉八雲 思い出の記 父「八雲」を憶う』(前掲) に所収]
- (15) 註(13)に同じ
- (16) 註(14)に同じ
- (17) 安田寛『小学唱歌集』民謡説の真偽』(櫻井雅人 ヘルマン・ゴチエフスキ 安田寛『仰げば尊し 幻の原曲発見と』小学唱歌集』全軌跡』(二〇一五年 東京堂出版)の第六章)
- (18) 同右
- (19) Lafcadio Hearn : *Glimpses of Unfamiliar Japan 2, XXVII. Sayonara!*, Houghton Mifflin Company 版 (前掲)
- (20) 註(14)に同じ
- (21) 同右
- (22) 同右
- (23) 中山エイ子『明治唱歌の誕生』(二〇一〇年 勉誠出版)
- (24) 同右

- 25) 註(14)に同じ
- 26) 同右
- 27) 同右
- 28) Lafcadio Hearn : *Out of the East, and Kokoro, Out of the East*, VII. Jiujutsu, Houghton Mifflin Company 版 (前掲)
- 29) 辻田真佐憲『日本の軍歌 国民的音楽の歴史』(二〇一四年 幻冬舎)
- 30) 同右
- 31) Lafcadio Hearn : *Glimpses in Buddha-Fields and The Romance of the Milky Way, The Romance of the Milky Way*
- 32) VII. A Letter from Japan, Houghton Mifflin Company 版 (前掲)
- 33) 同右
- 34) 註(14)に同じ
- 35) 同右
- 36) 同右
- 37) 同右
- 38) 同右
- 39) 同右
- 40) 同右
- 41) Lafcadio Hearn : *Glimpses of Unfamiliar Japan* 2, XXIII. From Hōki to Ōki, Houghton Mifflin Company 版 (前掲)
- 42) Lafcadio Hearn : *Shadowings and A Japanese Miscellany, A Japanese Miscellany, Folk-Love Gleanings : Songs of Japanese Children*, Houghton Mifflin Company 版 (前掲)
- 43) 同右
- 44) 同右
- 45) 註(3)に同じ
- 46) 註(42)に同じ

ラフカディオ・ハーンが楽しんだ日本音楽

二二

(47) 市河三喜編「Some New Letters and Writings of Lafcadio Hearn」(一九二五年 研究社)

註(14)に同じ

(49) 註(13)に同じ

— 文学部教授 —